

〈公募論文〉

機能動詞「ナル」の発揮する受動表現的特性について 「世話になる」、「～ヨウニナッテイル」など

沢田 奈保子*

キーワード： 機能動詞, 受動表現, 求心的方向性, 背景化, 表現のシステム

要 旨

本稿は、機能動詞「ナル」の発揮する“受動表現的特性”を、語彙論、統語論と連動する運用論の立場から指摘し、中・上級指導用マニュアルの文法記述の充実に寄与することを目的としたものである。

「世話になる」、「御馳走になる」は、機能動詞「ナル」が、「スル」と対を成し、自他対立と語彙的受動態を特徴づける連語である。また、授受の補助動詞を伴わずに「感謝」という発話行為と直接に結束するという、その運用上の振る舞いの特徴から、受動表現の一種「モラウ受益文」に通じる求心的方向性と伝達的特性を備えていることが指摘される。

「このカードを差し込むと、ドアがあくようになっている。」などの例文に見られる文末の分析形式の「～ヨウニナッテイル」は、統語的には目的を表す「ヨウニ」と同様の補文を埋め込む包摂力を持ち、“状態変化”という実質的な意味を失った機能動詞「ナル」と「テイル」の結合が、「スル+テアル」との対立に支えられて一つの“表現のシステム”を作り出し、より背景化の進んだ、受動的・状況中心的表現効果をもたらしている、属性記述タイプの修辭的な表現類型であると認定される。

はじめに

文中において、原義すなわち本来の実質的な意味を保ち、述語の基幹部として振る舞う動詞を「本動詞」（あるいは「実質動詞」）と認定するならば、実質の意味を担う基幹部を他に預け、専ら文法的機能を果たす構文要素として振る舞う動詞は「機能動詞」として位置づけられよう¹。本稿は、日本語教育の中・上級における文型、表現類型の指導という観点から、最新の文法参考書等であまり積極的な検討が加えられていない機能動詞「ナル」の運用上の諸特徴を取り上げ、文法事項として記述するための基礎作業を試みるものである。

機能動詞としての「ナル」の意味・機能は、機能動詞の代表とされる「スル」と同様、一様で

* SAWADA Naoko: 大阪大学大学院文学研究科学生。

¹ 「機能動詞」の規定については、村木 (1991: 203-298) を参考にしている。

はない。本稿では、「ナル」のいくつかの機能的特性のうち、“受動表現的特性”として特徴づけられる諸現象を指摘し、語彙論、統語論と連動する運用論の立場から、その位置づけや記述のあり方を検討することにする。検討対象として扱った言語形式は、連語の「世話になる」、「御馳走になる」のグループと、文末形式の「～ヨウニナッテイル」である。

1. 「世話になる、御馳走になる」

1-1. ヴォイスを担う「ナル」

- | | | | | |
|-----|----|-------------------------------|--------------|-----------|
| (1) | a. | 山田氏は太郎の世話をした。 | (Xガ Yノ Nヲスル) | [世話をする] |
| | b. | 太郎は山田氏に世話になった。 | (Yガ XニNニナル) | [世話になる] |
| | c. | #太郎は山田氏に世話をされた ² 。 | (Yガ XニNヲサレル) | [世話をされる] |
| (2) | a. | 山田氏は太郎に御馳走をした。 | (Xガ YニNヲスル) | [御馳走をする] |
| | b. | 太郎は山田氏に御馳走になった。 | (Yガ XニNニナル) | [御馳走になる] |
| | c. | #太郎は山田氏に御馳走をされた。 | (Yガ XニNヲサレル) | [御馳走をされる] |

働きかけの主体(仕手)を X, 受け手を Y, 実質的な意味を担う基幹部の名詞を N とし, (1), (2) を観察すると、「世話になる」、「御馳走になる」は、それぞれ「世話をする」、「御馳走をする」との対比において、仕手と受け手の交替による降格現象が認められ、「～ニナル」と「～ヲスル」は対になり、自他の対立と同時に受動・能動の意味的対立をも示していることがわかる。また、a, b, c の三段階に分けて観察すれば、c は働きかけの事実関係は同一でも、使用される発話環境は、a, b と著しく異なる有標の表現であり、能動文 a と組み合わせられ、ヴォイス的な意味を特徴づけるのはむしろ「ナル」を用いた b であるということが確認できよう。つまり、これらの連語における「ナル」は、自他対立と受動・能動との二重の語彙的ヴォイスを特徴づける機能動詞として振る舞っているのである。このことは、他のサ変系連語³と比べてみた場合、一つの際立った特徴であるように見受けられる。「スル」と「ナル」が他動詞・自動詞の対立を担うのは一般的だが、同時に能動・受動の対立も担い、基本的な受身形であるはずの「N (ヲ) サレル」が殊更に被害を含意する有標の表現として体系から排除されているという特徴は、ここに挙げた「世話になる、ごちそうになる」タイプの連語にしか認められない。このタイプの連語における「ナル」は、文法的受動態を押さえて語彙的受動態を確立させる、いわば語彙統語論レベルで“ナル系の受動文”を形成する役割を担っている機能動詞と認定されよう。

² 「#」は発話の環境を変えなければ、不自然と判定されるもの。

³ 「N (ヲ) スル」という構造の機能動詞結合を仮にこう呼んでおく。

1-2. 授受表現との共通性—発話行為との結束性において

「世話になる、御馳走になる」が、“語彙的受動態”を特徴づけるということは、これらの連語に含まれる「ナル」が、機能的に求心的な方向性(すなわち矢印が自分の方に向かっている、egocentric な方向性)を持った動詞として振る舞うということを意味している。また、働きかけの方向を共有する「N(ヲ)サレル」と発話環境において対立するということは、これらの連語には文法的受動態では表し得ない類の表現的、伝達的特性が備わっているということを示唆する。このことは、語彙統語論を超えた運用論の立場から検証することができる。すなわち、次のような発話行為との結束性のテストによって、これらの連語に内在する表現的特性を浮かび上がらせることができるのである。

- (3) 今日は a. おまねきいただきまして ありがとうございます。
 b. おまねきくださいまして
 c. *まねかれまして
 d. *(私を)おまねきになりまして
- (4) 遠いところを a. おたずねいただきまして ありがとうございます。
 b. おたずねくださいまして
 c. *たずねられまして
 d. *おたずねになりまして
- (5) この度は a. 娘がお世話になりまして ありがとうございます。
 b. 娘がお世話いただきまして
 c. 娘をお世話くださいまして
 d. *娘が世話されまして
 e. *娘をお世話なさいまして
- (6) 先日は珍しいお料理を a. ごちそうになりまして ありがとうございます。
 b. ごちそうしていただきまして
 c. ごちそうしてくださいまして
 d. *ごちそうされまして
 e. *ごちそうなさいまして

(3), (4) は一般の動詞、つまり特にそれ自体受動の意味を担うような求心的方向性も、恩恵を含意するような伝達的特性も持っていない動詞を用いた例である。このような一般の動詞によって表される動作・行為を「感謝」という発話行為と組み合わせて表現する場合、単独では整合せ

ず、いわゆる「授受の補助動詞」の添加が必要になってくる。このことから、日本語には、感謝の気持ちを表出することが発話の伝達目的になっている場合、その感謝の根拠に相当する前文は、話者が相手の動作・行為によって恩恵を受けたことを(話者が受益者であることを)明示するような表現になっていなければならないという運用上の制約があり、そうした手続きを踏まなければ、前・後件は結束して一つのテキストを構成するとは認識されないことが確認されよう。文法的受動態のほうは、動作・行為の受け手であるという求心的な方向性は表せるが、伝達特性として受影者⁴の「被害」を含意するため、「感謝の表出」という発話行為とはなじまない。そこで、求心的な方向性と発話者の利益を同時に表すことのできる授受の補助動詞を伴うことが要求されるのである。このような「感謝」という発話行為の要求する運用上の制約は、次のような、伝達上対極を成す発話行為である「陳謝」との対比によって、顕著な特性として浮かび上がる。

- (7) 遅れて、申し訳ありません。
- (8) たびたび予定を変更して、すみません。
- (9) 弟がお仕事のじゃまをして、すみませんでした。

これらの例に見られるように、「陳謝」という発話行為は、根拠として提示される前文の述語に何ら補助的な要素の添加を義務づけない。このことから、日本語のような授受表現の体系を持たない言語を母語とする学習者にとって、一種のスピーチ・フォーミュラともなっている「感謝」という発話行為の表現の習得が、意外に難しいものであることがうかがい知れよう。

一方、(5)、(6)を観察してみよう。これらはもちろん授受の補助動詞の添加によって適切に結束する。しかし、先の分析によって文法的受動態と同じ方向性を持つと認められた「世話になる、ごちそうになる」が、単独で適切に結束しており、しかも慣習的にかなり熟した結びつきになっていることに注目すべきである。これらの連語は、「感謝」という発話行為において、授受の補助動詞を伴わずに使用することができるという、他の一般の動詞と異なる特徴的な振る舞いを見せる。それは、これらの連語を構成する「～ニナル」が、「～ヲスル」との対立で受動の意味を担い、かつ基幹部の実質的な名詞の語彙的な意味内容から、主体が受益者であることが一般に定型化している(慣習的に定着している)ことに起因すると考えられる。つまり、「世話になる、ごちそうになる」の「～ニナル」は、求心的方向性と受影者の利益の含意という点で、受動表現の一種と認定されうる「モラウ受益文」(すなわち、passive benefactive)⁵に通じる意味的・機能的

⁴ 益岡 (1991: 192-197) 参照。

⁵ 益岡 (1991: 198-201), Masuoka (1981: 70) 参照。

特性を發揮していると分析されるのである⁶。

2. 「～ヨウニナッテイル」

2-1. 構文論的観点から見た“変化構文”との違い

- | | | | | | |
|------|----|-----------|-----|-------|---------------|
| (10) | a. | 彼は日本語が話せる | ヨウニ | ナル | 状態変化 |
| | b. | 彼は日本語が話せる | ヨウニ | ナッタ | 話せない……………→話せる |
| | c. | 彼は日本語が話せる | ヨウニ | ナッテイル | |
| (11) | a. | 彼は日本語が話せ | ナク | ナル | 状態変化 |
| | b. | 彼は日本語が話せ | ナク | ナッタ | 話せる……………→話せない |
| | c. | 彼は日本語が話せ | ナク | ナッテイル | |

(10) は、一般に「～ヨウニナル」という形で提出され、基本文型の扱いを受けているいわゆる主体の“状態変化”を表す構文（以下、「変化構文」⁷と呼ぶことにする）の例である。対応する反義表現は、「ヨウニ」を取り去り、「述語動詞＋否定辞」の連用形に「ナル」を接続させた(11)のような構文となる。

(10), (11) とともに、a～c の意味の違いは、補助形式「ル/タ/テイル」の表すアスペクト的対立によると見ることができる。従って文型の提示は肯定表現の基本形である「～ヨウニナル」に代表され、記述は一本化される。つまり、(10)c. の「～ヨウニナッテイル」などを独立した一タイプとして解説する必要はないわけである。

しかし、次のような文の「～ヨウニナッテイル」は、どうであろうか。(10)c. とは別のタイプと見るべきではないだろうか。

(12) Q. どうやって中に入るのですか。 A. このカードを差し込むと、ドアがあくようになっています。

(13) Q. この「日本語学習辞典」の特色は？ A. この辞書は、アルファベット順で引けるようになっている。

(14) 部屋には台所の設備があって、料理ができるようになっている。

⁶ このほか、「感謝」という発話行為は「陳謝」と異なり、根拠の提示にかなりの丁寧さを要求するということにも注意しておかねばならない。待遇を表す授受の補助動詞（～テイタダク、～テクダサル）を用いないこれらの連語は、話し言葉では敬体の「一まして」を取り（つまり常体の「一て」は不可ということ）、しかも基幹部の名詞に丁寧さを表す接頭語（「お」、「御」）の添加が義務づけられる、などの文体的制約を受ける。この現象は、同様に「モラウ受益文」との互換性の高い機能動詞結合（連語）「紹介に預かる」などの場合にも確認される。例：御紹介に預かりまして、ありがとうございます。

⁷ 益岡・田窪（1989：82）の「変化の構文」参照。

(12)~(14) に用いられている「~ヨウニナツテイル」は、(10)c. とは大分様相が異なる。(10)c. は(10)a. にアスペクチュアルな要素を添加しただけの(従って、付加される意味はアスペクト的側面に限られている), いわば“変化構文のアスペクト的派生”とみなすことができ、当然その使用条件として、変化が起こる前の状態を発話者が知っていることが前提とされると言えよう。しかし(12)~(14)の場合は、そのような前提のもとに使用される「変化構文」のアスペクト的派生とは考えられない。(12), (13)の場合は発話環境を変えれば変化構文としての解釈も成立しうるが、(14)の場合は、“動き”のない状態述語を用いた前文との整合性に起因し、変化構文としての解釈は成り立たず、従って、次の例が示す通り、アスペクチュアルな三系列は揃わないことになる。

(15) *部屋には台所の設備があつて、料理ができるようになる。

(16) *部屋には台所の設備があつて、料理ができるようになった

このような観察から、(12)~(14) に用いられている「~ヨウニナツテイル」は、変化構文とは同列に扱えない、一つの独立した類型として分析・記述しなければならないという見通しが立てられる。つまり、語彙統語論の立場から分析的に考えれば、このタイプの「~ヨウニナツテイル」は、述語基⁸から離れた補助的な文末形式(形態論的立場から言えば「複合辞」と認定される)であり、「ナル」は状態変化という実質的な意味を完全に失い、分析形式の一部として固定されてしまった“機能動詞”(形態論的立場から言えば「形式動詞」と認定される)であると考えられるのである。

次に、統語論的な立場から、この文末形式の包摂力や階層性のテストを行ってみよう。

まず、(12)~(14)のタイプは、反義表現が(10)とは異なる「~ナイヨウニナル」という形で表されることが指摘できよう。

- (12') ドアは、このカードを差し込んでも、 #あかなくなっています。
あかないようになっています。
- (13') この辞書は、アルファベット順では #引けなくなっている。
引けないようになっています。
- (14') 部屋には台所の設備がなくて、料理は #できなくなっている。
できないようになっています。

⁸ 寺村(1991: 24-26, 193) 参照。

変化構文のほうは、そもそも状態変化を表すのであるから、名詞述語なら「医者になる」、形容詞述語なら「赤くなる」などのように、「述語の連用修飾形式+ナル」が原則である。動詞述語の肯定形の場合は、(10)に見る通り、形式名詞「ヨウ」(形式名詞と言っても“サマ”という原義は生かされていると見られる)の介在がなければ連用的な接合ができないわけであるが、否定形の場合は、否定辞が形容詞的活用をするため、「ヨウ」の介在を必要とせず、(11)に見る通り、「～ナク」の形で直接に接合する仕組みになっている。

それに対して、(12)~(14)のタイプは、「～ナク」の形では成立しない。このことは、このタイプの「～ヨウニナツテイル」が、変化構文とは異なる統語構造を持つ形式として機能していることを示す。

そこで、想定されるのが、目的の「ヨウニ節」との共通性である。目的を表す接続形式「ヨウニ」は、次のテストからも確認されるように、ガ格や否定辞ナイを含んだ節を包摂しうる。

(17) [子供たちが誤って池に落ちない]ように、柵をこしらえた。

(18) [このカードを差し込むとドアがあく]ように、私は3時間もかけて調節した。

このことから、(12)~(14)のタイプの「～ヨウニナツテイル」は、目的の「ヨウニ」と同様の補文を埋め込む包摂力を持つ、「[補文]ヨウニ+ナツテイル」という構造に分析されうる文末形式であり、文全体の意味への貢献度から見れば、実質的な意味内容を補文に預けた“ムードの助動詞に近い構文要素”⁹ととらえることも可能であることがわかる。このことは、次の例に見られるように、この形式が変化構文の「なる」を包み込む階層関係を有していることから支えられよう。

(19) 3回続けて暗証番号を間違えますと、カードは使えなくなるようになっています。

上の階層関係は、同時に、変化構文(10)(11)の「ヨウニナル」が、かなり述語基よりに位置づけられる補助動詞的なものであること、その違いの本質は、分節されうる動詞「ナル」の“実質性の喪失の度合い”に起因している可能性があることを示唆する。変化構文の「なる」は、状態変化という実質的な意味を残しており、原義を変質させてもいないという点で、完全に機能動詞化しているとは言いがたいからである。

⁹ 助動詞については、寺村(1991)に従い、述語に属する使役態や受動態を作る“態の助動詞”と、述語に属さない“ムードの助動詞”を階層上分けて考える。

2-2. 表現類型としての「～ヨウニナッテイル」の位置づけ

次に、運用論的観点を導入し、この形式の使用条件と伝達される意味を検討し、その表現の成り立ちの分析から、表現類型としての位置づけを試みる。

2-2-1. 使用条件と伝達される意味

まず、このタイプの「～ヨウニナッテイル」は、次の例が示す通り、システムや“モノ”の機能を説明する状況や文脈で、任意に付加される修辭的な表現類型であるということが指摘される。

(20) Q. このドアはどうやってあけるの？

A. このカードを差し込むと、あくようになっている。

あく。

“修辭的な表現類型”というのは、「ある条件下ではじめて使用可能になるが、その条件が整っていても使用はあくまで任意である文末の付加的表現形式のカテゴリー」¹⁰ というように規定しておく。変化構文の「ヨウニナル」は、2-1. で述べたように、「述語基に近い」性格からいっても修辭レベルの要素ではないと言える。このことは、次のように、変化の実現が情報的に十分価値を持っているような文脈を設定してテストすることにより、確認できる。

(21) Q. いつになったら、話せるようになるでしょうか。

?話せる

A. 特訓すれば、来年の今ごろはかなり 話せるようになっているでしょう。

?話せる

次に、伝達される文の意味、表現効果を“言い切り”の文との違いから引き出してみよう。

まず、言い切りの文(述語に付加的な表現類型を加えていない文)は、主題として提示される名詞に制限がないが、「～ヨウニナッテイル」を付加した文の主題として提示される名詞には制限があることが指摘されよう。

(22) ベルを3回鳴らすと、子供たちがドアをあけます→ベルを3回鳴らすと、子供たちが
ドアをあけるようになっています

¹⁰ 但し、その表現効果が連文や文脈中のテキストの結束性に関与し、非文とまでは言えないまでも、使わないとやや舌足らずな印象を与えるというケースはあり得る。

- (23) 子供たちは, ベルを 3 回鳴らすとドアをあけます → ??子供たちは, ベルを 3 回鳴らすとドアをあけるようになっていきます

このような制限から、この文末形式は、原則としてシステム、設備、モノの機能の説明に限定されて用いられる表現類型であることが確認できる。

また、次のテストから、この表現類型は特定の時点に限定されない習慣的・反復的状況、もしくは恒常的属性を述べる、動きのない“性質文”的な性格を持っていることがわかる。

- (23') きのうち 3 時にベルを 3 回鳴らすと、子供たちがドアをあけた → *きのうち 3 時にベルを 3 回鳴らすと、子供たちがドアを
- | | |
|-------------|-------------|
| あけたようになっていた | あけたようになっていた |
| あけるようになっていた | あけるようになっていた |

このことは、先の 2-1. で指摘した通り、(14) の後件が、動きのない状態述語を用いた前件と並列的に整合していること、及び「～ヨウニナツテイル」が目的の「ヨウニ」と同じタイプの節を包摂する統語的な性質をもっているということなどからも裏付けられる。

説明のために用いられる性質文であるということは、たとえ主題が顕在していなくても、現象描写文のような典型的な無題文¹¹には属さないということである。主題は、「ドアは」のようにモノとして明示的に特定、あるいは復元できる場合もあれば、「機能は、ここのシステムは、制度は」というように、復元が漠然性を帯びる“状況陰題”¹²的な題目として分析される場合もある。しかしいずれにしても、題述文的な性格を持っており、補文の表す内容は、恒常的に潜在する“属性”として叙述されていると言える。そしてその特徴的な表現効果としては、叙述されるシステム、設備、モノの機能などに関する潜在的状态が、全く自然に実現されたものではなく、仕掛け人に相当する関与者の存在があり、その外的・意図的な力によってもたらされたものであることをぼんやりと暗示する、いわば“微弱な人為の含意”とでもいうような意味が伝達されるように見受けられる。このことは、「～ヨウニナツテイル」を付加した文では、言い切りと異なり、起因あるいは原因として間接的に関与者の存在を言語化できることから裏付けられよう。

- (12'') 当局の発案により、このカードを差し込むとドアがあくようになっていきます。

→ ?当局の発案により、このカードを差し込むとドアがあきます。

- (13'') 編集部の工夫により、この辞書はアルファベット順で引けるようになっている。

→ ?編集部の工夫により、この辞書はアルファベット順で引ける。

¹¹ 仁田 (1991: 43-44) 参照。

¹² 加藤・佐治・森田(編) (1989: 178-179), 仁田 (1991: 43-44) 参照。

(14'') オーナーの配慮からか、部屋には台所の設備があって料理ができるようになっている。
→ ?オーナーの配慮からか、部屋には台所の設備があって料理ができる。

言い切りにした場合は、そもそも素材そのものを客観的に提示できるだけで、関与者の存在を暗示するような付加的な含意を生じる余地は全くないと言えよう。(12'')~(14'')において言い切りの文がやや舌足らずで不整合になるのは、属性実現の原因となった要素を積極的に述べているにもかかわらず、それを受けとめる修辭的要素を欠いているからであろう。つまり、“微弱な人為の含意”の伝達こそが、「~ヨウニナツテイル」に託された修辭上・表現上の役割であると考えられる。そこで、次に、この“微弱な人為の含意”のよってきたるところを、認知語用論的な“表現の類似性、平行性”という視点から分析し、「~ヨウニナツテイル」の表現類型としての位置づけを試みることにする。

2-2-2. 補文をとる受動文、及びテアル構文からの類推

2-1. において、「~ヨウニナツテイル」は目的の「ヨウニ」と同様の補文を包摂する性格を有していると指摘した。また、2-2-1. において、「~ヨウニナツテイル」には仕掛け人に相当するような“関与者”の影を暗示する効果があり、間接的な“原因”という形で言語化させることが可能であることを指摘した。この構文上、意味上の特徴から想定されることは、「[補文]ヨウニナツテイル」という構造が、受動文に近い表現的特性を発揮しているのではないかということである。そこで、表現の類似性、平行性という視点から、補文をとる動詞¹³の受動文と、“疑似受動文”的位置づけを与えられているテアル構文¹⁴との関連性を確かめてみよう。

まず、補文をとる動詞「(~と)言う」を用いた受動文「~と言われている」の受動文としての特性、及び“疑似受動文”とも呼ばれうる「テアル構文」の特性を概観しておく。

「~と言われている」は、次の(24)が示す通り、補文標識に当たる「~と」をそのまま残すため、受動化によって降格現象(能動文中のガ格成分の非ガ格化)は起こるものの、昇格現象(非ガ格成分のガ格化)のほうは起こり得ないタイプの受動文である。

(24) 人々に[水戸黄門は多くの町人を救った]ト言われている

テアル構文については、次に示したように、昇格現象の存在と、表現類型的観点から見た受動文との類似性¹⁵が特筆される。

¹³ 小泉・船城・本田・仁田・塚本(編)(1989: 24)で解説されている「文を目的語として取る動詞」のことである。

¹⁴ 「~ガ~テアル」という構文について、村木(1991: 196)では「疑似受動文」、益岡(1987: 219-220)では「A型」(「受動型」)という名称が与えられている。

¹⁵ 「~ガ~テアル」という構文の受動文との類似性については、益岡(1987)が指摘している。

- (25) 私は机の上に聖書を置いてある
 (26) 机の上に聖書が置いてある≡(何者かによって)机の上に聖書が置かれている

このような特性を踏まえた上で、「～ヨウニナツテイル」を付加した文を観察すると、以下の
 ような表現のシステムが浮かび上がる。

- (27) a. 当局は[このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ した
 b. 当局は[このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ シテアル
 c. 当局のほうで[このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ シテアル / シテイタ
 ダイテアル
 c'. [このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ シテアル / ??シテイタダイテアル
 c''. ??当局によって[このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ シテアル
 (28) a. ?当局によって[このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ されている
 b. 当局のせいで、[このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ されている
 (29) a. *当局によって[このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ ナツテイル
 b. 当局の発案により、[このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ ナツテイル
 b'. 当局の発案のおかげで、[このカードを差し込むと、ドアがあく]ヨウニ ナツテイル

(27)の観察から、仕掛け人を(意図的な働きかけをする)動作主として明示するタイプの(27)a.~
 c. は、「する」が他動性の高い本動詞として働いているとみなすことができるが、仕掛け人を不
 明あるいは不問として明示しないタイプの(27)c'. (必然的に敬語表現が使われる余地がなくなっ
 ている)では、「スル」はもはや本動詞用法とは言えない、属性を記述するための修辭的な分析形
 式の一部、つまり固定された機能動詞になっているとみるべきであり、この段階において、「～ヨ
 ウニナツテイル」とは、同一の事実関係を伝えることのできる、表裏一体の関係を成している
 と言えよう。

また、(27)c'', (28), (29)の比較から、以下のように判断される。

「～ヨウニナツテイル」という分析形式は、属性の記述に関して仕掛け人を(意図的な働きかけ
 をする)動作主として明示しない場合、すなわち関与者を不問とする場合に、最も優先的に用い
 られる表現類型である。構文的には降格も昇格もないが、表現レベルでは動作主の背景化の進ん
 だ受動文の代わりをしていると見られ、いわば機能動詞ナルがスルとの対立に支えられて一種の
 “疑似受動表現”を形成する役割を担い、目的の「ヨウニ」の連想から生じる微弱な人為の含意
 とともに、状況中心的表現効果をもたらす“表現のシステム”を確立させていると分析される。
 「サレル」が優先的に用いられるのは、(28)b. などのように、やはり受影者の被害を表すときで

あり、発話環境の対立という点で、ナル系の疑似受動表現「～ヨウニナッテイル」と、文法的受動態を用いた「～ヨウニサレテイル」は、相補的な関係にあると言えよう。

3. ま と め

以上、本稿では、連語の「世話になる、御馳走になる」、及び文末の分析形式「～ヨウニナッテイル」を例とし、機能動詞「ナル」によって特徴づけられるその受動表現的な特性（「求心的方向性」と「背景化」）を、語彙論、統語論と連動する運用論の立場から指摘し、文型の位置づけや記述のあり方を検討した。

「世話になる」、「御馳走になる」は、それぞれ「世話をする」、「御馳走をする」との対比において、仕手と受け手の交替による降格現象が認められる。これらの連語に含まれる「～ニナル」は、「～ヲスル」と対になり、自他の対立と同時に受動・能動の意味的対立をも示す。つまりこれらの連語における「ナル」は、基幹部の名詞に実質的な意味を預け、自らは二重の語彙的ヴォイスを特徴づける機能動詞として働いていることが指摘される。さらに、「ナル」を用いたこれらの連語は、他の一般の動詞と異なり、授受の補助動詞を伴わずに「感謝」という発話行為と直接に結束するという運用上の振る舞いの特徴から、受動表現の一種「モラウ受益文」に通じる求心的方向性と伝達的特性を備えていることが指摘される。

「このカードを差し込むと、ドアがあくようになっていく。」などの例文に見られる文末形式の「～ヨウニナッテイル」は、変化構文の「～ようになる」とは区別され、システム・機能の説明をするという文脈で任意に付加される、属性記述タイプの修辭的な一表現類型として位置づけられるべきものである。このことは、この文末形式を「～ヨウニ＋[ナル＋テイル]」という分析形式としてとらえることによって明らかになる。すなわち、「～ヨウニナッテイル」は、統語的には目的を表す「ヨウニ」と同様の補文を埋め込む包摂力を持ち、“状態変化”という実質的な意味を失った機能動詞「ナル」と「テイル」の結合が、「スル＋テアル」との対立に支えられて一つの“表現のシステム”を作り出し、より背景化の進んだ、受動的・状況中心的表現効果をもたらしていると分析されるのである。

【付記】 本稿は、平成3年度日本語教育学会秋季大会（1991年10月5日 於同志社大学）における発表内容に加筆訂正したものである。

参 考 文 献

池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』、大修館書店。

- 加藤彰彦, 佐治圭三, 森田良行編 (1989) 『日本語概説』, 桜楓社.
- 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』, むぎ書房.
- 小泉 保 (1990) 『言外の言語学—日本語語用論—』, 三省堂.
- 小泉 保, 船城道雄, 本田晶治, 仁田義雄, 塚本秀樹編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』, 大修館書店.
- 駒田 聡, 佐藤恭子, 鈴木 睦, 砂川有里子, 三牧陽子, 渡邊裕子編 (1990) 『中・上級日本語教科書文型索引』, くろしお出版.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析—生成文法の方法—』, 大修館書店.
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」, 『日本語学』 Vol. 6, No. 5, 37-48.
- 寺村秀夫 (1976) 「「ナル」表現と「スル」表現—日英「態」表現の比較—」, 『日本語と日本語教育—文字・表現編—』, 49-68, 国立国語研究所.
- (1991) 『日本語のシンタクスと意味 第 III 巻』, くろしお出版.
- 中右 実 (1991) 「中間態と自発態」, 『日本語学』 Vol. 10, No. 2, 52-64.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』, くろしお出版.
- (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』, ひつじ書房.
- 森田良行, 松木正恵 (1989) 『日本語表現文型 (NAFL 選書 5)』, アルク.

Masuoka, T. 1981. Semantics of the benefactive constructions in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics* 14: 67-78.

Shibatani, M. 1985. Passives and related constructions: A prototype analysis. *Language* 61: 821-48.